



静かだった。

蝉の音が、ざわざわと怯えるように控え目になっているのを肌で感じる。いつの間にか、あたりの陰影がどこか薄いモノに変転している。空に照る太陽が、にわかに張り出した鈍色の雲に遮られ出しているのだ。

日陰である土蔵の片隅もまた、陽気のはかないモノになり、むっとした湿度が熱をさげて、薄気味悪い悪寒が寺崎の背筋に走った。

「……………」

寺崎は心許ない気分で空を見上げた。

そこに、じゃっ、と土を踏みしめる音がする。

一瞬、緊張が走る。

ここに来るとすれば、まずはこの商家の住人か、または雪絵をはじめとした獅土堂の武俠たちか――。そして、現在進行形で自分たちを追っている立場の、建設工事に反対の敵性の者たち。

寺崎が胃をわしづかみされているような思いで、土蔵の奥まった場所の出口を注視する。

と、血塗られた刀の先が視えた。どきりとする。胸が締め上げられ、頭を逆さまにされたような血の走り方をした。

じゃ、と更に足が踏み込んできて、土蔵の影に入り、刀の持ち主が全身を現す。

「……………」

現れたのは、雪絵だった。

ぶはわあ、と寺崎は息を盛大に吐き出す。そして、自身に落ち着きを言い聞かせるように咳払いをした。

そんな寺崎の様子に、雪絵は静かに彼を視て立ち尽くしている。その瞳が、やや精彩を欠いている気がしたが、寺崎はそれを気遣うまで気持ちの余裕が回

第四章 太刀の六

復していない。しかし、味方の登場に、寺崎は胃の心地を少しはましにされた
というように、腹をさすり一歩前に出る。

「坂本さん……、どうでしたか。もう、乱闘は鎮まったのでしょうか」

「……ええ」

雪絵が応える。擦れ、消え入りそうな声音だ。

辺りは相変わらず蝉の声——日常の当たり前の音で満ちている。

「それは重畳。しかし、相手方には悪いことになりました。いや、詮無い話で
すな。いや、どうもまだ緊張しているようです」

更に一歩、雪絵に近づく寺崎。

「では、後のこともあります。早々に皆と合流いたしましょう」

「……………」

穏やかさを取り繕う笑顔の寺崎が、雪絵にあと三歩と近づいた……。

「ええ……そうね。後のことをしないとね」

後は、あなただけよ。

ヒュンツ と風が鳴り、影の中で鈍く閃くモノを寺崎は視た。

「?!———ツ」

一瞬の間——突然だった。

目の前に、視線のすぐ近く、自分の首元あたりに、ぬめりと赤く、鈍く煌め
く刀の刃が、ギラリと突き付けられていた。

寺崎は、事態が呑み込めず、現状に唾すら呑み込めない。

「……………雪絵、さん……………」

「……………」

雪絵は、無言で顔を伏せる。その視線の付け方で、一体どうやってこうも精
巧に首筋寸前で刃を止めるという芸当が出来たのか、と寺崎は場違いに思った。
そして、その顔をそろそろとあげた雪絵の瞳を視て、そして驚く。

見上げるように、ねめつけた据わった瞳。

女の子が睨むような時に、人によってそんな様子を可愛らしいとも評するものだが、しかし、目の前の少女がみせるのは、それは鬼女を思わせる恐ろし形相だった。視線で人を殺すかのような、尋常ならざる氣勢に満ち満ちた、度の過ぎた鋭い瞳。

「……………っ」

その瞳を視て、寺崎は感じる。

獅子堂邸で時折目にする彼女の顔は、その様子は、物静かであり、気色ばんでいるところなど視たことがないし、彼女の保護者であるところの春花が口にする内容からも、滅多に気を荒立てることのない、大人し目の気性であると寺崎は認識していた。雪絵はそんな少女なのだが、しかし、自身が刀郷に入って初めて目にした暗殺者としての彼女や、組の敷地内で体格のいい荒くれ武俠たちに混じって稽古に励みむ姿など、寺崎の与り知らない処も彼女にはあるのだ。

これも春花の話に聞くが、新米の武俠としても活躍目ざましいという。坂本雪絵は、いざ刀を握れば、その性格の大人しさなど鳴りを潜める——雪絵という少女は、そんなアンバランスとも、両極端ともとれる人間性を持っているのだと、寺崎はじんわりと理解した。

これまで、直接の係わりがほとんどなかったにも拘わらず、この短い遣り取りで、切迫して頭に血が巡り、そう認識させた。

だが、そうでありながら——どうであろう。今のこの少女は。

今この瞬間、寺崎の首に乾き始めた血が光る刀を突き付ける雪絵の、その顔、その瞳は……。

(殺意、というモノだろうか……、これが)

そのなんと、冷たく、そして静かな焰の燃ゆる様。

影って来たせいか、土蔵の影という条件も相まってか、はたまたやはり、彼女の醸し出す感情に当てられたか、肌に寒イボが走って行く。

恐怖しているのか。

自身の命の危機に。

それは、当たり前とえば、当たり前だった。彼女は、『後はあなただけだ』 と

口にした。

それは、今さっきまで護衛団が交戦していた、電波塔の建設反対強行派ともいえる者たち——その襲撃者の一団を、彼女が斬り伏せてきたことを理解させる。

同時にそれは、仕事が片付いたという事実以上に、『次はあなただ』 という意味をも寺崎に教えるのだ。その白刃を振り下ろし、血肉を断ち、斬り貫き、命を奪う対象に、寺崎悠一郎という人間も含めている——と、雪絵がそういう意思をもっているということを明確にする。

(私がこの子に嫌われているのは、知っていたつもりだ……。しかし、それで斬り殺そうとしてくるとは……)

あまりに強引ではないか。

考えると、今まで起こっている襲撃で、敵から自分を護りきることが出来ず、手違いで彼は敵の手にかかったのだ、と見せかけるつもりか？ などといった発想が浮かぶ。

それに従ってやる訳にはいかないのは当然だが、と寺崎は雪絵の顔を見遣る。

「雪絵……さ、ん？」

「あなたにその名を気安く呼ばれたくはないわね」

「……では、坂本さん……。これは、どういう訳でしょうか？」

二人は立ちすくむ。寺崎は体が不自然な姿勢で固まったままで、ぶるぶると足や背の筋を震わせながら、ゆっくりと会話を試みた。ほんの少しずつ、刃を首元から遠ざけるように動きながら。

しかし、直後、ぐっと刃が一層首の皮に肉薄する。それに目を閉じかけた寺崎だったが、刀が命を奪い切らないうちにと、冷や汗をかき混乱しそうになる頭で、一つ一つこの状況について考え始めた。

それがどれほどの時間の猶予のある作業であるかは判別がつかないが、しかし、寺崎とて自らの職分と、命を使う目的のようなモノを胸に動く人間だ。おいそれと殺されるわけにはいかない。

「……………」

第四章 太刀の六

また背筋が、自然と白刃を逃れるように身をのけ反らせる。その姿勢に汗がにじみ、息があがっていくのを感じながらも考えるのは、何故彼女は自分を殺したいのか、という坂本雪絵の気持ちだった。肝心なのは、彼女の心の内だと、寺崎は考える。

「坂本さんは.....私がお嫌いなようですが.....、私は邪魔なのではないでしょうか.....」

唾を呑み込み、顔が紅潮するように血が昇るが、努めて自らに冷静を強いる寺崎。

刀で脅されるという経験は、初めてのことでないが、一、二ミリ以内という皮肉寸前まで人を斬り殺せる刃が迫ったのは、これが初めてのことだ。武俠の太刀回りをある程度の覚悟をもってその場に居合わせられる彼でも、こうもギリギリを迫られれば、緊張しない方がどうかしている。

対する雪絵は、俯き、酷い三白眼で睨みあげていた顔をそのままに、押し殺し、捻り出すようにぼつりと吐き出した。

「そうよ.....、あなたはとても邪魔だわ.....。だから、いなくなってくれと助かるの」

いなくなる、か。と寺崎は粗い息を吐きながら思考する。

それは、人として、死んでいなくなって欲しいのか。

それとも、自分の目のつくところに現れて欲しくないのか。

相手が望み、欲するモノが分かれば、交渉の、話し合いの余地がある。.....しかし、それはこちらのすべてを差し出して達成させてはならない、と寺崎は反芻する。

「私は、職務.....立場がある身ですから、こんな私でも譲れない部分は、あります.....、この郷から去る訳には、いきません」

その言葉に、雪絵は瞳を見開き、がばと身を勢いづかせて左手で寺崎の肩を掴むと、どこにそんな力があるのかという剛力で、彼を土蔵の壁に叩きつけた。その痛みに、寺崎が目を細め、歯を喰いしぼる間も許さず、再び血染めの刀が彼の首に突き付けられる。

「でしたら、殺しますか.....？ 私を葬り去って永遠にあなたの前から消し去

ろうという……そういうつもりで、こんなマネをされているのですか……っう」
ギリと右肩を芯のある果実を握りつぶすかのような躊躇いのない力で握り付けられ、寺崎はうめく。。

(……この子、は……)

痛みの中で、寺崎は身を緊張させながら、しかし脳髄は不思議に静けさを得ていく。

それは、以前初めて経験した、寺崎が何かを悟ってきた時に訪れる感覚だ。
(殺すのならば、とうに殺している。しかし、春花さんも語っていた……雪絵さんは真面目な子だと……)

そして、寺崎はいくつか——というか、大まかに雪絵が自分を邪魔に思う理由にも目星がついてきた。それを、確かめなければならない。

寺崎は、どうにか息を吐き、苦しいながらも雪絵の鬼女のような形相を見据えて、静かに、諭すように言う。

「坂本さん……。春花さんの哀しむことは、すべきではない、と私などでも思いますよ……」

だんっ!! と激しく、左腕一本で大の男の躰を揺さぶり、壁に寺崎の身を叩きつける雪絵。それは、十代前半の少女のそれではない。屈強な男性の剛力に匹敵する威力で、寺崎の身を苛んだ。

そして、雪絵は、心が爆発した。彼女の普段の物静かさの中に、そんなモノが隠れ、秘められていたのかという声で、くわと叫んでいた。

「あんたがッ！ あんたが春花さんの名を口にするな!! このウスラボケがッ!!」
がん!! がん!! と再三にわたって繰り返し、彼自身への怒りを叩きつけるように、寺崎の身を強く壁に叩きつける雪絵。

「——っ、う、……うう」

痛みに全身を強張らせる。頭も硬い石の壁に勢いよく何度もぶつかって、鈍器で殴られたように重く響き、くらくらする。

雪絵の物静かな少女の瞳が危険な彩を灯している。今、寺崎が春花の名を口しただけで爆発した禍禍しさは、明らかに怒気であり憎悪。

しかし、それが却って寺崎にとって、確かめられることがみえさせた。

寺崎は胸の中で頷く。

自らの激情に、雪絵も珍しく息がつまったようで、荒々しく息を吐いてはを繰り返している。そんな彼女は、今はどこか泣きそうな顔をしているように、寺崎には視えた。瞳に水分の膜が張られ、顔は火照ったように血の気に満ちている。

寺崎のような堅気の者が視ると、それはまるで子供がだだをこねているときのような、そんな風にも捉えられる。泣きそうになって、自分の叶えたいことを訴えているかのような。

(実際、そういうことなのだろう……。しかし、彼女は幼いとはいえ、人の命を背負う者だ。私のような部外者が、何も知らずに甘やかして良い筈がない)

少し口許を歪めると、寺崎はそんな雪絵の瞳を視て、言う。

「坂本さん、こんなマネが何になります……。あなた自身が行いとして悖ることをしては、今以上に苦しむことになると思います……。ですから、」

「説教するつもり?! あなたはこういう場合、みじめに命乞いでもするべきじゃあないかしらッ?!」

奥歯をぎりと噛みしめ、雪絵は肩を掴む手に更に力を込め、刀をこんどこそ皮が切れて肉を裂き、血を逆らせるほどに近づけた。恐らく腕に軽く力を込め刃を引いたら裂けるであろう突き付け方だ。今はかろうじて皮は裂けないが、肉が刀の圧力に押されて痣でも出来そうである。その寺崎の喉がごくりと鳴る。

(解かってはいても、恐ろしいものだ。ここまで白刃が迫ろうものならば)

寺崎には、既に理解が出来ていた。

雪絵は、武侠の倣いと気位を重んじ、堅気をその刀で斬るつもりは——ない。(この子は、気に入らない人間である私でさえも、その理……。いや、侠気に則っているのならば、彼らのスジに従って、殺すことをしたくないのだろう)

それが、先程から刀を肉薄させていながらも、恐ろしい形相でじりじりと迫り、殺める気配を見せながらも最後の一步を——命を奪うという決定的な一撃に出ない理由。

そして、寺崎にはもう分かっている。

彼女――坂本雪絵が、何故こんなマネをしてきたのか。

この黒髪が美しい少女が、醜く特定の人間を忌み嫌い、邪魔に思う理由。

幼さとは言い切れない。

寺崎とて、これまでの人生で、そんな感情を抱いた瞬間や時期がなかったとは、断じて言えない。

しかし、彼女には……目の前の『そのせい』で、泣きそうになりながら、憎悪と怒りと嫌悪感をぶつけて、寺崎に向けて人を殺す利器を向けている彼女には、正しく伝えなくてはならないと、寺崎は思う。

それが、雪絵には必要だと、寺崎は思うのだ。

そして、それがこの極度の緊張状態と、雪絵にしても引っ込みのつけどころは考えてすらいないこの状況を、解決に導くことに繋がると思える。それに何より、寺崎は春花からも願われていることを、まだしっかり心に刻んでいる。この郷の人の気持ちをわかる関わり方をして欲しいと。

（それに応えることをするには、骨が折れそうですが……それもいつか、何かになるのでしょうか……）

「坂本さ……、いえ、雪絵さん」

寺崎は言う。

目の前の迷い子を――心乱れ、自分にその感情をぶつけることしかなくなるほどに、静かに激しく思いつめた少女に。しっかりと、時間を積み重ねてきた者としての、心遣いを以って。

「私に嫉妬しても、あまり意味はないですよ」

雪絵は、瞳の奥まで見開いた。

ざわざわと、遠くで木の葉が揺れている音が耳に届く。

雪絵は、躰が強張る思いをしながらも、咄嗟に敵から身を遠ざけて、自分に有利な立ち位置を確保するときのように、寺崎から飛びのいて間合いをとって

いた。

その顔は、瞼を閉じていても感じる夏の日差しの赤色のように染まり、暑さのせい以外の理由で汗が噴き出した。瞳はせわしなく、今現在の敵と認識できる寺崎という男を見据えて、しかし、見据えているようでわふわふとキョロキョロと、迷子の子供が不安げに周囲に視線を泳がせているように、動いて定まらない。

「……えっ、……………な、な……ッ」

口も舌がもつれたように、言葉が言葉にならない。

いや、今の雪絵は、自分が何という言葉を以って、眼前のこの気に喰わない男に切り返すべきかを、完全に理解不能の自失と化してしまっていた。

そして、身体の芯の腹の底から、じりじりと、ひりひりと重く昇ってくる熱いモノに、頭をくらくらと惑わせながら、どうにかこうにか、少しは知恵をつけた筈の脳髓で、状況を整理する。

雪絵は、目が回る思いで言葉を浮かべる。

(な……………、な……、なんで、なんで、……なんでわかるの……!?)

自分が目の前の男に向けている感情。

その発生源であると考えられる、大元の、憧れをよせる人である春花自身にも、雪絵はそのことを口にすることは出来ない胸に畳み込み、秘すべき思いだと感じていた。そんな暗くて、黒くて、恥ずかしい気持ち。

雪絵の心と春花と寺崎とを結ぶ、複雑で歪で、しかし斬っても斬れない不定形でありながら、確かに胸にわだかまる感情。

自分でも、それを 『嫉妬』 とう言葉で言い表せることを、書に現れる人々から知り得てはいた。

(で、でも、私はそんなこと、おくびにも出していないのに……、なんでこんなにあっさりと、それも確信的に見抜かれるの……っ)

それは、何か見抜かれる要素があったのだろう、自分が気付かないだけで——と混乱する頭のどこかが理解を示す。そして本来、どちらにしろそれが凶星であるかどうかは、シラをきれば良いだけのところだった筈だ。しかし、自分

第四章 太刀の六

はそれを肯定する素振りを見せってしまった。これでは今さら隠すこともできそうにない。

雪絵は口唇を切れそうなほどに噛む。綺麗なぷりっとした口唇を、歯がゆそうに噛んで、ギリと刀を握る手に力を込める。その刀は今、飛び退いた獣が鋭敏にかつしなやかに身を構えた姿勢でいるかのように、宙に浮いたままだ。

動揺を隠せず、そして自分の失態に気付く端から抑えることもできず赤面していく。その様は、寺崎から視て、瞳を潤ませた少女が手にする血染めの刀が、今はどこか不格好で滑稽にも映る。

「雪絵さん……あの、」

「！ ぐっ……………ううっ……………ツ」

寺崎の呼びかけに、はっとして思わず身を竦める雪絵。そして、糸が切れた人形のように、ふ、と腕から全身から力が抜け、すっと刀を構える腕をおろした。

「……………」

「……………」

両者の間に、沈黙がおりる。

昼頃の空模様は、いつの間にかやや重たそうな雲が太陽を隠し広がっていた。陰った空気が湿り気を肌を感じさせる。

「……なんでよ、……」

「?!……」

雪絵の、耳まで真っ赤にして俯いた顔。その可憐な口から、苦くてまずいモノを吐き出すかのようなうめきが漏れる。

「なんでよ……っ。あんたがいなければ、私はこんな思いをせずに済んだのに」
ぽつりと、地面にしみが広がった。

雪絵の顔に、一滴の天からの雫が当たり、それがゆっくりと頬を伝って顎からおちていく。それは、ぽつぽつと、天の堰が決壊したように、徐々に泣き出したように大量の雨が降り注いできた。

「……うわっ。降ってきましたね」

第四章 太刀の六

空を見あげて息を吐く寺崎。その口ぶりが、雪絵が屈辱に歯噛みし、拳を固く固く握りしめる思いを、不自然ではないカタチでそっと受け流していた。

動かない雪絵。俯いて、腕も全身も筋肉が弛緩したように、棒立ちで……雨をその黒髪と全身、レースの羽織に受けるのに甘んじている。血に濡れた刀に、雨水が滲み、ほんの少しだけ溶かしていく。

寺崎は、そんな雪絵に歩み寄り、そして、先程のことがなかったように、それが当たり前のように、今はそっちの方が大事だとばかりに、雪絵に言った。

「取り敢えず、雨宿りしましょう、雪絵さん」

この商家の土蔵は、内部の床面が周囲の地面よりも高くなっている造りで、南京錠の掛かった入り口には三段の階段が設けられていた。そして、その扉上部には、季節や天候への対応だろう、割としっかりした庇が設けられている。その庇で雨をしのぐ二人は、蒸し返す雨の中で黙って、半人分の距離を隔てて佇んでいた。

不意に、立って並んでいた目線の高さの隅で、動く気配があることに寺崎は気付く。

隣を向くと、雪絵がしゃがみこんで、土蔵の入り口の階段に腰を下ろしたところだった。

帯に留めた鞘に納めた刀を、膝と腕で抱くようにしてしゃがみこんでいる。顔は伏せているので、寺崎からは表情は窺い知れない。

雨音は続き、地面のくぼみに雨水が溜まって水滴を弾いている。その様子を、寺崎は心許ない思いで見つめる。

こういう時に、女性を労わり気遣う気の利いたことが言えれば、今も独り身ではなかったのだろうか、と自嘲気味な笑いが起こってくる気がした。そんな気がするならば、ここは場をもたせる言葉を探そう、と寺崎は頭を回し始める。

しかし、そもそも十代半ばほどの少女といえ、寺崎と二十は年齢が違う。その世代の社会的属性はわからないでもないが、そもそも雪絵は自分と同じ西方の人間ではない。それに、彼女の武俠という生業——その生活環境の切実な

実情などを想像するのは、やはり容易ではない。

そうすると、もはや何でも良いから、他愛のないことでも良いから、躊躇せずに口にすることが大切な気がしてくる。気の利いたことを言おうとするから、余計に空気がぎくしゃくするのでは？ と。いや、それですげない反応をされるケースは、十二分を何倍にしても足りないくらいに在り得る話ではあるのだが、とそう考えない訳でもない。

そんな風にぐるぐるとし始めて、結局沈黙を通して時間が過ぎていく。

そんな自分に対して、嘆息する寺崎。

兎に角、ここは沈黙のままに雨があがるのを待ち、そのまま今日の仕事はお開きと、そのままこの少女と別れるのは、あまりにも後腐れが悪いのではと寺崎は思うのだ。

(なんでもいいから……か)

話を切り出してみようと肚を決める。しかし、先の雪絵の様子から、春花に関する事柄には触れない方がいいのだろうなあ……と気を巡らせていると、耳に声が届いてきた。

「……………あんたはさ」

「はい……？」

咄嗟に声のした方を向き、見遣る。そこには雪絵がいる。今の声は、彼女が座り込み俯いたままに、喋っていたのだ。

寺崎は、返事に困り雪絵の続く言葉を待つ。

「あんたは、春花さんと、添い遂げたいと思っているの？」

突然、雪絵の方から話しかけてきて、発せられたその言葉に、寺崎は吹き出してしまいそうになった。肺から、腹から込み上がってくるモノがあった。咳込むように口に手を当てた。

しかし、ぶふ、と閉じようとした口の隙間から音が漏れた。それは、ともすれば笑いをこらえたように雪絵にも受け取れただろう。雪絵でなくとも、人からしてみれば、馬鹿みたいなことを言っていると、そう笑われたと怒気を抱くところかもしれない。

だが、雪絵は先程の鬼女のような勢いがまるで見られない、ちいさな呟きで問う。

「どうなの？ ……答えてよ」

振り続ける雨を視て、寺崎は息をつく。正直なところを話しても、また刀を向けられるということは、あるのか、ないのか。そんな判断はつかないし、今は雪絵にそんな駆け引きでうまいこと場を凌ぐのも悪い気がした。

危機的状況でやむを得ないとはいえ、あれだけはつきりと、内面を暴露したのだ。これ以上優位を図るのは、人として悪辣な気がした。

それに、外交でも兵法でも、相手の逃げ道や余裕を根こそぎ奪うのは上策ではないという。雪絵の気持ちを逆立てて、満足する気もなし、獅士堂相手にそんなことをして得もない。

そんな風に、やや気の躊躇われる内容の話を切り出す口実を、自分に言い聞かせる寺崎。そして、小さく咳をして、言った。

「いえ、正直なところ、そんなことは考えていません。私は、自分の仕事への誠意の方が、今は大切にしたいと思っている男です」

「……嘘。あんたの春花さんと話す時の顔とか視ていたら、わかる。好きなんでしょう」

やれやれ、と寺崎は綺麗な黒髪をつむじを視て言う。

「そういう感情がないとは、いいませんね。坂本さんは、魅力的な女性だと思うので。そこは、否定しません。しかし、同時に私は、あの方と関わり、その身の上を知るほどに思うのですよ。あの方のような立場の人と結ばれたなら、私はきっと私の職務を全うできなくなるだろう、と」

顔を伏せたまま、雪絵は黙っている。その無言の姿勢が 『それは何故か』と問い返している気がして、寺崎は再度咳をして続ける。

「……心が変わるのではなく、立場が変わるのではないかと考えます。そしてそれは、私だけでは収まらないかもしれない。あの方と、この郷と、その民に迷惑をかけることになるかもしれない。そう考えられます」

そんなものか、と寺崎は自分でも思う。

第四章 太刀の六

一人の女性を愛する気持ちを、迷惑だとか、利害を秤にかけている自分の気持ちとは。

だが、と寺崎は腹に力を入れる。

「私は、そんなカタチをとってまで、自らの愛に生きようとは思わないです。そりゃ、こんな私なんかと寄り添って、支えてくれる女性がいれば、それは望外に嬉しいことですがね。しかし、私にとってあの方は、素敵な女性ではありますが、そういう所帯を持つとかいうカタチに納まるべき人ではないと……そう、考えております」

チツ、と舌打ちのような音がする。雪絵が悪態を吐いているのだと分かる。

「なにそれ、ふざけてる」

「私は真摯なつもりですが」

「そんなものなの？ 男と女って、よくわからないな……」

少し顔をあげて、口許を外気にさらす雪絵に、寺崎は苦笑する。

共感や理解がなくとも、在り方のひとつとして寺崎のような者もいると耳にいられてくれるだけでもいいと、そう思う。

実際、それが寺崎の春花との距離感——付き合い方となっている。

そうした付き合いでも、自らの慕う母が、どこかの男と仲良さそうに朗らかに語り合っている姿を見せられてきた雪絵にとっては、それだけで愠気を禁じ得なかったのだろう。寺崎はそれが理解できた。

だから、こういうカタチであれ、雪絵がわだかまりを抱えている事柄を少しでも解きほぐす結果になったならば、寺崎も冷や汗をかいた甲斐があると思う。

冷や汗をかく、ということに記憶を思い起こされながら、そして寺崎は小さく笑った。

「色々なのでしょう、きっと。男女の交わりも、人との交わり方も。それぞれがあり、それぞれに素晴らしい」

「……いいカンジにまとめるな。刺すぞ」

ザクリと斬り返す雪絵に、今度は乾いた笑いがもれる寺崎だった。

「……しかし、あれよね。あんたはもっと、弱っちいやつだと思ってたわ。」

なんとなく」

「ははは」

「みくびっていたようだわ。こんな気分させられるなんて」

心の内を見透かされたことを言っているのだろうが、迂闊にそれをなぞると、斬り殺されないまでも、腕や手の平の一つくらい刃物で刺し貫かれかねない。

「しかし、弱い、ですか……。それは当たり前なのですがね」

「何を言っているの？ 人が評価しているのに」

「いえ、私もそうなのですが、人とは、民も、どんな人間にもそういうところは、大なり小なりあるものだという話ですよ、と」

「ふざけないで。そんなの分からない。分かりたくもない」

「そうですか。それも良いかもしれません」

「曖昧に笑うな。本当にあんたはどうにも気に入らないよ」

咬みつきがちに荒んだ顔を向ける雪絵に、寺崎は「こんな話はどうでしょう」と微笑む。

「気に入らないという理由で人を殺していたら、突き詰めると人は最後には誰をも殺すことになるかもしれませんよ。歴史を見れば平和は断続的で、人間がわかり合えるのは、実は時間的に点なのだと理解せざるを得ません」

「……、点？ 一時的だと言うの？」

それは少し、不満を感じる雪絵。

自分が今ある環境の、割合仲が良く接している人たちとの関係も、一時的なモノなのだということか、と雪絵は怪訝に思う。寺崎は続ける。

「……しかしですね、思うのです。肝心なのは、その点が悪いモノだったら、良いモノに変えるよう働きかけること。そして、現在の点が良いモノならば、それを維持するべく努力することだと思のです。当たりのことを言うのですが」

人と仲良くする努力は大切だということか。確かに、人を傷つけるばかりが人と対することではないと雪絵にも分かる。

「ふうん。じゃあ、戯れに訊くけれど、そういうのって何が必要なんだろう。人

との関係を良くするモノって、なんなの？ 外交官としてはどうなのよ？」

雨足の変化を視て取り、寺崎はこういう時間も点なのだろうと思う。

「それは、職務上と人生上の経験なので、少し語りかねます。できれば、雪絵さんも自分が生きるうえでそれを学びとってください」

「ふん。……別にいいけれど」

ぷいと、反対方向を向き、歯を剥く雪絵。その顔が視えないながらも、寺崎は楽しそうに笑い、言う。

「しかし、春花さんを視ていて思いますが、あの方がこの郷を治める様にも、それは宿っているようです。それは、堅気の民への想いでしょう」

「堅気への、想い……」

「この郷の倣いとしていうならば、武侠の心にある 『仁』 ではないかと考えます」

「……………、『仁』。『仁』 ねえ……」

人のこころ——という意味だったと思う。白峰あたりが口にしていた言葉を、辞書で引いたことがある。

ひとのこころ、ってなんだろう。そう、雪絵は先程までの胸の内にわだかまり渦巻いていた波が引いたような、普段の “心に静けさを” 持った時のような脳髓で思考する。

「……よくわからないな」

「そうですか」

「チッ なによ、余裕ぶっちゃって。嫌い！」

歯を噛み首をぷいと振る雪絵に、寺崎は乾いた笑いを起こしている。雪絵は、その声をむかむかとしながら耳にして、視線は空に向かう。

(こういうのを、独り相撲っていうんだっけ……。この人は、春花さんに対しても私に対しても、この郷に対しても、私がこの人に抱いていた印象とは違う在り方をしているし)

(まあ、春花さんに対しての姿勢が、どこまで本気かは分からないにしても、まったく思いもしないことをこうもはっきり言えるものでもないだろうし……)

第四章 太刀の六

(はあ……。なんかもう、恥ずかしい……)

(嫉妬しているのを見抜かれて、そのうえ脅しをかけたのに穏やかな態度をとられて……)

(もう、穴があったら入りたいっていうの、こういう時に遣うのかとか、わかっちゃうのがホント馬鹿みたい……)

はあ、と息を吐いて、次いで雪絵はすっと身を起こす。その機敏な様に、寺崎は一瞬身を強張らせるが、雪絵が肩をはたいているのを黙って視る。

「雨……もうすぐ止むかな」

「どうでしょうかね……」

そして、ぷつりと黙り込んでしまう二人。

雪絵は、不機嫌そうな伏せがちな瞳で、横目に並んで立つ寺崎を視る。

……続く。